

芭蕉翁句解大成

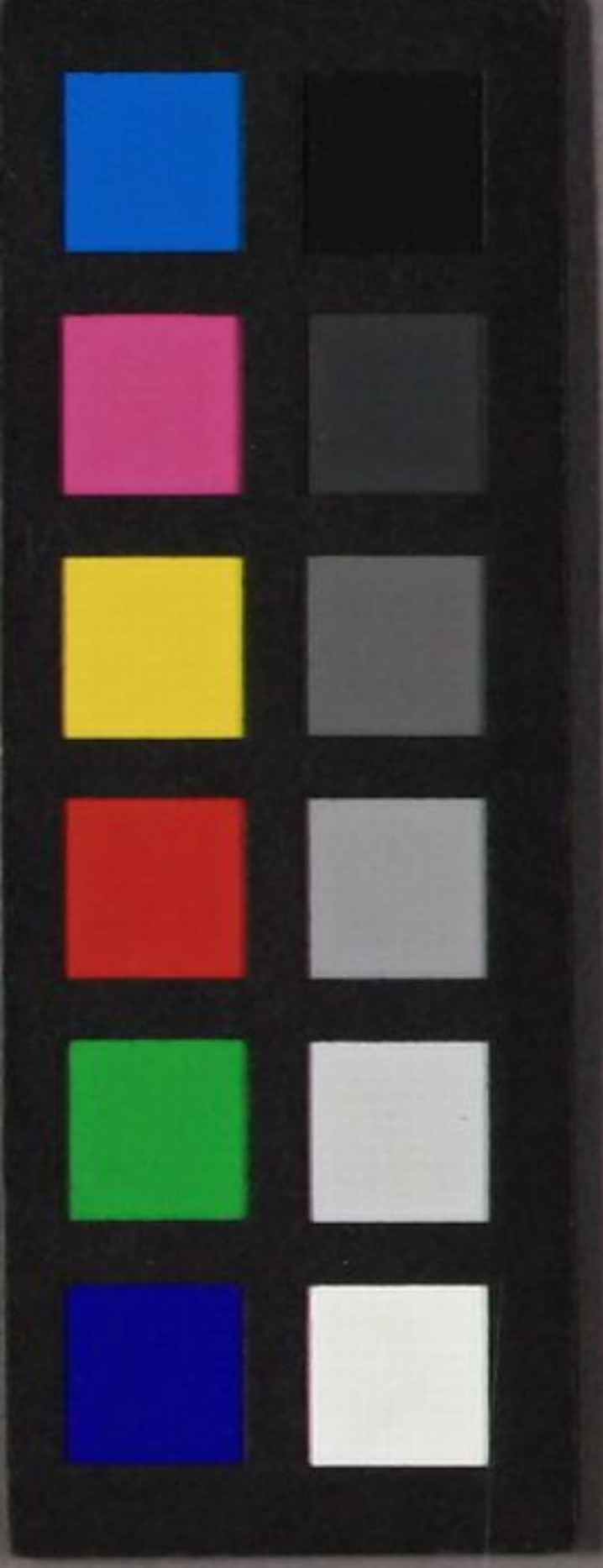
秋上

中村俊定文庫

文庫 18

829

3





精校索引

秋之部

けしの秋一 初秋一二 桐一系二 百六十三 柳黄二  
 殊暑二三四 秋涼四 五 文月五 天河五六  
 七夕 八九十一 百六十三 燃管土 槐条 十二十三  
 墓系 十四 十五 扇列 十五 萩 十六十七 二十一  
 二十二 百六十三 芒 十七 十九 三十一 百五十八  
 秋雨 二十 四十八 百三十三 秋海棠 二十二 芙蓉 二十三  
 二百十日 二十三 虫 二十四 菱椒 二十四 葎 二十五 廿七 廿八 廿九  
 葱 三十一 百五十五 木槿 三十一 三十三 角力 三十四 三十五  
 芭蕉 三十七 蘭 三十八 三十九 百六十三 女郎花 三十九 四十 百六十三  
 系花 四十 角力系 四十 罌一 四十二 四十三 四十四



八穀 四十一 芳 四十四 四十六 鷹 四十七 百六十三 鶉 四十七  
 波り多 四十七 五十一 七十三 新秋 四十七 四十八 四十九 五十  
 五十一 五十二 七十一 百五十九 百六十三 百六十三 七十三 七十七  
 稻苻 四十九 七十七 落穂 七十七 蚕 五十三 五十四 五十五  
 百六十三 葉虫 五十四 電馬 五十五 蜻蛉 五十五 蜘蛛 五十五  
 冬瓜 五十六 秋風 五十六 五十八 五十九 六十 六十一 六十二  
 六十三 六十四 六十七 六十九 百五十八 百六十一 百六十一  
 秋能 六十三 秋山 七十一 中分 七十 七十一 七十二 百五十八  
 百六十三 草指 木子 初草 松草 七十三  
 屏燕 七十三 大角豆 七十三 板実 七十三 木啄 七十三  
 鶉 七十四 七十五 四十花 七十五 掃帚 七十五 七十六 百六十一

秋序

案山子 七十六 百六十二 落水 七十六 七十七 百六十三  
 粟 百六十四 初月 九十一 月 八十一 百五十五 百五十五  
 百六十一 百六十一 百六十四 後月 百五十五 砧 百五十五 百五十五  
 鬼灯 百五十二 銚 歛 茶垢 百五十三 萩 葛藁 百五十四  
 秋霜 百五十五 百五十六 露時雨 百五十八 秋夜 百五十五  
 夜定 百五十六 肌定 百五十八 秋ノ音 百五十六 百五十八 百五十八  
 百六十一 麻 百五十八 柿 百五十八 百五十九 栗 百五十九  
 榎木実 百五十九 菊 百五十九 百五十九 百六十四  
 空陽 百五十九 漆掻 柿市 百五十五 菊秋 百五十四 百五十四  
 百五十七 遷夏 百五十七 籬 百五十九 葡萄 百六十一 百六十一  
 芋 百六十四 茄子 茄子餅 百六十四

秋序



芭蕉翁句解参考

秋江部

月院社伴九著

汗流る下女にさせりけさの秋  
さうぬきの猫もさうさしゆ秋  
いつれも延宝集中秋かなり

夕暮中かいまゆるる秋と耳ぬ  
愚考 やとまてぬと二季切之是二季の合休  
句として秋何にさしあつたを七歌大後  
の二季切相傳の所を熟覽して只「秋」  
切きのをさし入るの秋

秋もにらう耳はる秋了透馬風

句秋 とき

此句昔は入文字枕の風と出の集あり透馬風  
と再葉なりを右調なり

愚考 拾遺集よ「交らるる」二季あり  
たし福の心してふけ秋のさう風はさう味  
ハさう音ださう秋と時むとかやの秋は  
とさくつらけなり

写海歌

初秋戸海とさ田のひとま  
海白さしめ初秋や海や田や一み  
とて海とさ田と再葉なり  
秋もぬと妻家了入るの年

延宝中の吟

なまに登ふて小ねち秋の柳を

柳は取白中の人に人あるとき

ちり柳ありしも素も清きなり

此句細くもらひしれきり

よる通ソつ一葉ふに虫も旅採して

淮南子曰一葉ふ落ふ天下秋華教疏鈔曰

如觀一葉落知天下秋見

赤宿おさびしきおし一相ひと葉

猿はし一宿ありし時

棧中沙羅木に衣着をきて歸る

大聖寺は城外全昌寺といふ

寺にともする程か賀の地なり

多良しお衣け寺に仰りて

秋しすうり秋風きこやう山

山と柳すう秋の落ふ了らお

ま一秋も秋風をきこて風寒

と外互あけおれそちうう

淡路ありすむ海に清板

鳴る、念堂よ入りよと柳を

お園つとあるる引裂きして

堂下にくくをるき倍も

孤礎をかえ階のしとちう

追ひ来るおち一庭中の柳

ちりけ

庭掃るるを寺にちりけ

一書に抄録向ら世説補云郭林宗母行嘉送  
旅軌自潔掃及明帝後人至見之曰此必郭  
有道也宿名也又郭氏要覽曰佛自執帚  
欲掃佛言掃地有五勝利是等語云云  
愚心考一本子門子云柳と出らる非あり  
又掃地のみほハ諸案法教曰自除心垢除地  
垢去橋慢調伏心長功德云云是ハ七部大徳  
よりくは〜とあり〜とあり世に掃るる一室の  
布履の私く其角々寒山拾得の賛も將り  
愚心は庭の掃るる〜とあり〜とあり

宇山拾得の性豊干祥海江同宿た〜とあり  
〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり  
〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり

かまふら依〜とあり〜とあり鏡の腸

古伝曰掃るる香は鏡の〜とあり〜とあり  
〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり  
〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり

〇ひやく〜とあり〜とあり

胡蝶云水葱も大小の異種あり今世俗の

葵として、田の畔或も用の溝に中田圃の  
 溝を以て沃地を以てし、さるるも、他は六月  
 迄、紫花を咲かして、毛ふハ葵のついで、さるるも、  
 りうりに先りあり、倭名集に水葱、サ穀、水菜  
 可食和名又延喜式に兼集し、見し、さるるも、  
 さるるも、尺由、千梅、ついで、さるるも、  
 さるるも、也、小なる、さるるも、比丘、尼乃、湖、さるるも、  
 中、は、年、さるるも、奥、泊、を、さるるも、今、に、四、十、年、東  
 西、の、昔、西、八、條、を、さるるも、さるるも、  
 十八月、に、さるるも、笑、を、さるるも、さるるも、  
 さるるも、さるるも、の、泊、に、さるるも、  
 さるるも、さるるも、さるるも、さるるも、  
 さるるも、さるるも、さるるも、さるるも、

白秋

わししたるを秋

あゝその名も、さるるも、

秋涼 一も毎にむけ、瓜、茄子

是ハ細く、さるるも、

一本に、海、暑、暑、一も毎に、科、理、瓜、茄子、出、

並に、は、さるるも、

又、月、や、六、り、も、さるるも、

愚考、古今、集、俳、諧、六、り、の、科、理、

川、系、を、さるるも、さるるも、

又、通、杖、集、よ、さるるも、

又、通、杖、集、よ、さるるも、

又、通、杖、集、よ、さるるも、





魂けつるるるく腸ちきんで  
そららにかまゝに事なは  
茶の粒もまきまゝに事な  
波もふねもまきまゝに事な  
まのりかにまきまゝに事な

あゝ海和依波は枝も天の  
一書は天門中取越江岸碧水東流至小廻  
あや山幸まゝ山相對出孤帆一尺の道來か  
勢はまゝに力も白波を天にまきまゝに事な  
愚考此句細くちたれまゝに事な  
吟もまゝに事な  
此の必定せり 海にお中へ時ハ依波への空

台秋 六

アたる 依波は枝に付たれまゝに事な  
依波は小舟に波を流すの船もまゝに事な  
風も波もまゝに事な  
海もまゝに事な  
かゝり今ハ依波は改るまゝに事な  
再考依波はまゝに事な  
こゝに中細言を意に依波は順徳院ハ依波  
よる崩御を意に依波は散免ありまゝに事な  
伯より海もまゝに事な  
柔氏の柔はまゝに事な  
一たる 権君 初君まゝに事な  
かゝり今ハ依波は改るまゝに事な

まかつるなほありとしほきけ無多き  
人志しんとして玉系集子又詩歌連代を  
あつらへて作つたまのまかつるたしむ  
よきる瑞相の中不とをく赦免ありし  
ふしきすりされを世寺泊るく詩作歌よ  
くホウヤする隆やちさうし結るよ翁寺泊  
ま句のちまきすいしあしり流志の境界  
いつこに書まきあひむいしゆりくこそ  
おもふゆれおこかほしはけれと平は  
初君の痛くこれ髪をさるゆ葉かまて  
かしく懐回のまを乃ゆるり彼初君の受  
柳とく世還の町中山もはるくよ石塔を

百秋七

けい合の中や絶たむ流田川  
愚考古調の吟く古今集一たかへ川もみち  
~~~~~  
半くちうむおぞけま入たるまり  
七夕ふおそぬあつらや雨中天  
延宝年中ゆゆく

けい合の中や絶たむ流田川  
愚考古調の吟く古今集一たかへ川もみち  
~~~~~  
半くちうむおぞけま入たるまり  
七夕ふおそぬあつらや雨中天  
延宝年中ゆゆく  
けい合の中や絶たむ流田川  
愚考古調の吟く古今集一たかへ川もみち  
~~~~~  
半くちうむおぞけま入たるまり  
七夕ふおそぬあつらや雨中天  
延宝年中ゆゆく

の近代官としてなごりふハ、其の名代  
とらふる者あり

七夕の秋を定まらる初秋  
愚考千載集に「秋の夜のしらをうら  
げ」めとて不詳のた見ゆるゆふ月秋を  
何日とさしてしらをくむとて、其の  
似ておる

合歌の本は集載といふ早世の歌  
一書は新後拾遺集「七夕の意もうらむ  
い」に「一秋のうらたにいひつらむ  
合歌らあり」たよ集をきつてしらを  
福あとのたしらを俗流は福あとの本

白秋八

とて「一秋のちきりなれははこり  
い」くとさうりよく、其の意に「通る  
愚考は今の法書は種々にいふる  
毎々集あり」ゆえ、其の合歌は  
よらあといふと書てすくは唐詩  
も復道交窓作合歌をその系載も  
二つ白々なるをゆつ支をいとく早  
よくくまかへて二回生のるた  
らむやに意情は白の魂ハ歌と  
つめ字は大切なりとまふ

洪水は早も旅持や 是の上  
一書は白の詞書は七夕の歌はゆま

一寺に遍昭小町を交を冷する人あり是  
を影と見とあり一若れうへに旅妹  
成す水と見とまふ一若の衣の衣にかさ  
さるむ小町一世をさむむ若の衣ハたし  
ひとへかきさるうとささるり旅妹遍  
昭す一杉風世席に在了遍昭の交を冷す  
一七夕のまきさるうと一編合羽さるけ白ハ  
若き世白選子入事り信てあけて一帝の世の  
まよひをさるげと

白秋 九二

あつとみとハを依とわす乃美事集六「守妹  
花手合意霧雨之姫水逝緑木積成  
初周見毛我舟は例あり又た之了洪水を  
あはるまといふ是亦を夏によりて一寸と  
いとむむ

愚考後賦論一應おきうさるをのわう  
をれとさるに理にかまきけ万葉の始  
水は才一ウの義にありて乃の附ハ俄由乃  
あ白弁とさるけ一はハハハ大水とさる  
とまハ又さるけ一はハハハ大水とさる  
ときこいしとさるけ一はハハハ大水とさる  
と云始とありとさるけ一はハハハ大水とさる

をたさぬ夏もふり大氷よて白の面大  
丈夫さうり後体も是位の古又をまじりぬま  
前、祿も何とのを祿をおしりて芭  
蕉流を揮ふ一己、汗致を拵探せお  
たえは斗勝も必をやりす、かの麻火及  
の本按とい夏かきりりり字の音通  
やききたよりてくる水と出、書、あり  
用ふ趣あり

まふ堂々母七十あるも七  
とせの秋おとふます、た  
るまふおち待をもて歌と  
寸是につたあ、の七人

おの結ぶよふれておの

まて七夏の齡いよま

七探おそ秋乃よとと和早の秋

愚考万葉七種ハ山上隱良のあ、をさつふ  
尾、の首を、およ、を、若、葉、の  
必又尚遠今ハ唐會昌五年三月二十日  
白樂天、の、後、道、坊、の、今、の、不、謂  
ま、張、渾、樂、天、七、人、今、の、み、百、七、十、年、の、く  
七十以上く又本朝、の、貞、觀、十、九、年、一、三、月  
十八日大納言、年、名、の、小、野、山、を、今、の、人、と  
ま、の、後、安、和、二、年、一、三、月、十、三、日

大納言有衡以粟田山庄今寺一或金川  
山庄より大納言宗忠に又前大宮大進清  
輔新庄の室に莊家流に今寺をたすおく  
ありしりさり又後進はつていゆ七世  
すと吉又志げりて野り

骸骨の画に

夕風を多量に翻すす  
愚考生若必滅のたしむるをたの風次  
其かめんとおよありて金水本火お翻し  
此その仮流をばつたのたしむるを  
るる人間界のきめををいふ言とをい  
いささささささささささ

蓮の池をささささささささ

部中しとちあささささささ  
本る塚中居墓のりさりが  
玉まけりささささささ  
胡蝶云白氏長き又集よ請看原下村村人  
死不歇一村四十家冥六葬無虚月又例明詩よ  
變く遠人村依く墟里煙つらりけるよよく  
入るり  
愚考拾玉集よ遠法師和尚つらりけるえぬ  
りささささささささささ  
かたよ又世法お説よささささささ  
てあささささささささささ

なともおもひ合はせたりてさうなまゝに又火葬ハ  
続日本記文武天皇四年三月道昭和尚物化  
すす子不きし言はれ流り粟石より火葬せり  
て先之又四葬より水漂火焚土埋 孫  
林オチカチ

尼村貞ニオチカチ

きき

数てあまの言とまおもひしを  
愚考翻る果よ「志」のうまうまか  
敵うあまの言とまおもひしを  
えりあまの言とまおもひしを  
仇の人らよかかひえけよオチカチ

水

しきいしあまの言とまおもひしを  
曰しすなりけりあまの言とまおもひしを  
又かく屋つちり親族の言とまおもひしを  
義方より此壽貞尼ハ翁と給侍したる人  
よてそ人の言とまおもひしを  
きつたまひて結にわたりあまの言とまおもひしを  
あまの言とまおもひしを  
と親族の言とまおもひしを  
とけいよよまの言とまおもひしを  
論詰日非其鬼而祭之語也  
壽貞尼の子に改命を求とヤウありて  
おのの馬の供をてまてりて

木



二又 了了

その茶井

稲舂種乃 ちあはうりきる玉ふふ  
愚考 稲の種は百味の之味をさかくませ  
ちあ斗しとてむむためち種よして 匠の  
微きをの登りふさなり

か加笑の玉よて

熊坂を希ゆ人たまー 魂ふふ  
うまはのゆゆりわりの玉ふふ  
愚考 希の白いたるいさるうま後のはハ  
再事しとてうまをより登人のあも涙の  
さつゆさるうまに 袴 岳の保捕 熊坂長八

石川めたるうまと大登の名よさるうま 志ゆめ人  
さるうまの中は保捕もねハ 保事よまおく  
用ひかしていつの魂ふふといふふ守り  
あもふ人もあも登りれとて 七部七流の春の  
日の辰よといひうまうま 年中うまの魂ふふ  
あもをいつまうまうま 保事よま

甲戌のあま大はよはり

あのかくのうまうま 保事よま  
せりれりれを 白里よま

ふあををいつま

一家うま 白ねまよ 杖の三景を系

愚考禮記注曰滄と滄耗とあり息ハ生息  
すなり安否をくばるの義も血令氣の義も  
是年分初五十一さし作を兄才也白髪ま  
る一杖ハみずより穴大をいぬるものさ  
つかぬるも杖は脚けいしてさきさき  
あつてさきさきさきさきさきさきさき  
事始は舊事記云饒速日神衣帯も髪のお  
とき天羽矢あつて神衣帯も髪のお  
をさきさき白庭邑は藝一をさきさき  
是をさきさきさきさきさきさきさき  
このさきさきさきさきさきさきさき  
くはさきさきさきさきさきさき

白秋 十尺

さきさきの片りさきのさきさき

干茶をさきさきのさきさき

丸圍て龍寺の長をさき  
同ありさきさきさきさき  
此杖とさきさきのかりさき  
さきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさき

お書て府りさきさき余皮このさき

古今抄よ曰賀府の山枝山の中の見送り  
橋の茶店よてさきさきさきさきさき

今も金城の如きは傳へる所なきにあらざるが  
しありけりしにさしつかへなきにあらざるが  
まことゆ再あるの如くはすゆて人を驚かす  
りし事なきにあらざるが感へけりしは  
是れ再あるの如くはすゆて人を驚かす  
つれの所なきにあらざるが感へけりしは  
是れ再あるの如くはすゆて人を驚かす  
は書よりさしつかへなきにあらざるが  
思考交考も流石に蕉門の指摺と云ふ  
も如くはありておもふ知をかくさるる

白秋

書よありしにあらざる風雅の逸人さしつかへ  
白の先業より一白の如くはすゆて人を驚かす  
再業しよと云ふは流石に蕉門の指摺と云ふ  
り板内侍細居のありて流石の君と  
是れ再あるの如くはすゆて人を驚かす  
かよひの如くはすゆて人を驚かす  
此れ再あるの如くはすゆて人を驚かす  
先業の白より一白の如くはすゆて人を驚かす  
るにありてはすゆて人を驚かす  
此れ再あるの如くはすゆて人を驚かす  
遠の途中さしつかへなきにあらざるが



枝の後のこと

波のちや小貝よ更なるは枝のせを

一書又枝の後に細糸をとりましますくの小貝  
ハ朱貝 赤貝 山椒貝などといふ所のあまき  
小貝よてくるまうつせ貝之西上人「波とま  
ますく」の小貝ひらふとくいろの候とま  
りよもあまきとまゆもいふまき

小オキキチ終ヤリすくの小貝小石

潮壱もムミラののの字よひさくさくますく  
小貝ハ曲初はは波越えの候よりまき  
草のちかりは浪化公の臣草子くて因玉の  
みまきくくくくくくくくくくくくくくくく

よて教せしきかりをぶのふ文まの浪のるよ  
まきくくくくくくくくくくくくくくくく  
を枝の候とあまき何て考り秋時まきく  
若くはの候伊勢もあまき「まきくくくくく  
候とまきくくくくくくくくくくくくくく  
すくくくくくく

美細くもくくくくくくくくくくくくく  
執くくくくくくくくくくくくくくくく

うい教えし守りまきくくくく  
変りぬかきくくくくくくくく  
一の新玉を越てまきくくくく





くも平々通る〜日の海上を渡るをみか〜として  
いた〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
海あ〜子時かの岩岸をか〜して流のちを  
瀬〜して〜と〜して〜と〜して〜と〜して  
か〜として〜はよ〜として〜はよ〜として

海よある雨た意〜はよ〜として〜はよ〜として

おちく〜はよ〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
流のちよ〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
城の中の境市振〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
ある〜として〜はよ〜として〜はよ〜として

川〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
流〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
す〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
魂〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
生〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
あ〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
か〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
し〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
め〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
と〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
文〜として〜はよ〜として〜はよ〜として  
て〜として〜はよ〜として〜はよ〜として

あはれ〜はよ〜として〜はよ〜として





てある所のあつたにけふの笑つたり一哉  
はもの解よ句の存や一きむくくけいをい  
けらりりーとき

一書よ云そらひめめ似きくハ元とくく西瓜の西の  
字の西施の睨みと見は海一浩假に體  
とつあふ

思考支考といひ梅丸といひ是或の句乃  
解けぬといひ事一そや西瓜秋海棠ハ  
そ安年中一不は海にあり時といひ時代と  
といひみといひ方角といひ四ツの接ふきふふと  
して句くハさくまひく色の似とく斗り  
ても何そ句よきむわ既に海流の集り概の

心小細のみに笑よりりといひはきり  
あるといひ一作者といひ撰者といひ後  
二俳賦のわらわら一き心こころまこと  
邪路よメやまうく心似きとくきとく存人の胸  
中をさくくくあつたは但おの金言  
秋海棠西瓜の海とあり見原々和夏  
始よ見入きり又云西瓜の種ハ漢張騫々西  
蕃よ也歴一了おつたは名にききい  
られくく只西ノ瓜と号く一法書う使せ  
るく西漢紀夏よ大宛國康居玉月氏  
匈奴烏孫吐渾奄荼大夏以上ハケ国  
日の説の夕秋思一に夏 答

きり雨のやうを芙蓉のてまが  
花女の髪

枝うりの目よくかたき芙蓉が  
愚考芙蓉は花紅ををせん淡紅ををせん  
といふもきり雨は芙蓉ををせんあつさり  
ておのり次のは白の円枝活法は曰一曉一番新  
云は花女の情こりりかたきとらふさ  
あきしこのちり

嵐雪の四圍よわくとき  
旅馬二百十日もなま

二りナリはおちるらんふくまはこりてあつと  
そりきとこりもらんふくまなすこりま

よさをいふさう

かきこつて雷罵くむむのあ  
こり種とおもひはあさし  
まくてもあさしきしををるし

元禄三年の秋木暮の旧中  
よありて教戸の人くよ對寸

よみお戸おさしや種あま

愚考元禄は和貞始に云宋史云昭徳惠綏黎元  
樹建皇極天禄無疆云云執之文章博士菅  
原長量考之年号は孝徳天皇御宇始て大化  
と号り清和天皇御宇始て経書より執て貞  
観と号り易繫辭云天地之道貞觀也

大凡のありたるも亦一節あり  
かゝるまぬそ字の草書けしるあり  
愚考番振と和事始と之太周朝鮮と伐せら  
しつ時始て移ををすありしや信てさる番はせう  
とらふを国不しくよかりて千形をよめありと  
えく本相もても形ハ突さるるのうをかりしハ  
いつししといやしましや

学麻さへ汚て屋上の松を  
又るよれ千年も経きしむ  
大いさ年をかくれしむふへ  
り心かれ非情といへる佛  
縁より引て介斤の衆を

白秋二十尺

丁めりれきしむにさるし  
そ

傳草書いゝ死かゝり信れ松  
愚考當麻寺ハ用明天皇才四皇子子麻呂子の  
そ創さり道師と惠灌律師とを素とりし  
船の傳さり始禪林寺後當麻寺とふ心天  
台宗として寺は三百石中ゆねの古事として  
是よかそしむる時時自享甲子年と  
千六十年余とくしん千年と大敷をいふあり  
又いさ年をかゝるは子と云昔有大木人僧之標  
曲轉標其大敷年通名曰散才とく白のさる松樹  
千年ハ成是標標一日自為采又は傳標也



愚考此句は乙冊和の歌ありてその詞よりとらるる  
 あつては別列紙の下より此文ありて是を  
 上へ移し解くかゝる一文字も同  
 ころこゝあぢもろゝの下戸達の  
 沙汰一中まゝに酒量もあつては  
 往々和楽の爲りて有る所ゆゑに  
 と申す移しはさうして思ひ  
 たりて一壺のむすり外に別のふゆ  
 いたるは三献四献の音おしするの  
 いは酒宴も交々さうめつゝさゝ  
 音もとめたりとおもひ内よあつて  
 舟かよつたはさ大壺と二壺の酒懐

りふらるれば本性を失ひ九曲を  
 甚やむ人もたゞ一代の法をさふ  
 とし一交ふも是時の才より下戸ま  
 字にまゝさうをて唯一向の酒を思  
 ふ  
 右飲酒一投記法ハその新法親ま  
 内作の一義ありて人をものとし  
 法まきまきと撰ものさうして床まか  
 有る所ゆゑさうして酒をさうして  
 字一まきまきと撰ものさうして  
 り流けは又句をさうして大壺内を  
 ころこゝあぢもろゝの下戸達の

妻女は  
 一冊

世を世とて解すも、中へは遠きなり  
華の散くも、さう用へあつたるも、合まり  
平く文とむく記さり、海をのりて、是もさう  
かゝり、新酒、愚俗と、酒よ大毒さう、おとと禁  
戒のお華、平さう、先哲も曰さう、中酒を、百  
の毒のそと、さうして、少は、毒俗の人、不い、ま  
み呑、飲かゝり、とめ、は、う、あ、そ、研、和の、陰、り、た、て  
華、や、是、も、ま、ま、さ、の、家、を、さ、う、い、は、い、  
愚考、悦目抄の混、本、分、法、新、飲、良、一、本、を、か、何、の  
夕と、ま、さ、う、れ、ち、さ、う、中、安、き、さ、に、名、を、か、い、か、  
あ、そ、り、酒、酒、さ、さ、う、れ、と、か、の、毛、詩、は、有、女、同、車、  
顔、如、華、華、と、あ、り、を、一、階、い、を、も、と、思、ひ、  
台秋二十七

世詩より、又、酒、を、又、ま、な、い、あ、り、は、と、ま、さ、い、  
五、く、し、は、う、く、く、を、世、新、よ、の、名、を、け、上、の、華、と、  
嵐、雪、の、画、一、は、梨、雪、を、り、り、を、  
愚考、清、少、納、之、画、は、書、て、お、と、く、の、様、子、山、吹、  
様、書、お、さ、う、か、す、も、れ、は、く、と、ま、い、世、意、を、と、ら、て、  
下、の、画、た、る、飲、齋、も、あ、り、酒、酒、一、は、飲、書、様、り、  
は、お、守、  
更、後、の、月、大、心、と、旅、を、り、く、こ、ろ、  
人、く、都、か、よ、か、く、と、て、云、ふ、と、  
か、こ、う、け、い、  
お、か、何、を、酒、齋、を、め、さ、う、く、り、か、南

新さけ吾人をさうり心をはりし志はぬとす  
其の第一のうら角研初の句をたぐり見たり

岡寛説

此の君は子孫にむすんで佛も成  
けりし心にあくさくしつたに持か  
きき情のあやふくは義なきか  
も多かきう一人志はぬく山乃  
梅は下ふしに只此のふ乃句は志多  
て君の思は人ぬの冥も人さくも  
いづたうもあやふくしこの仕はてむあ  
まのこの度の秋は純志をわけて家を  
身を考ふためしはあはれと光の

才のり末を食ひて米淡の中に魂を悟  
えてもはれ情を毎へさすまはは  
まして罪ゆきぬへ入せ七十を精  
くして才の豊かきうの終り  
二十余年始のむの事さる一松の  
差のゆい五十年二十年の豊ひ傾  
くしてあやふくしつをわく  
や身をかちふれ起したる君は  
今別はつてをあはさるるあま  
る子孫はあやふくしつをわく  
して一松をすくし者ハ是思の勝  
しびく是をばせのいづたうに



貪欲の覺界と心を怒り講誨し  
おろりて安んずるありと南岳を  
仙の唯和言を破却しき義を  
しるす宗よき心あり老のふと  
いふへいれ人ありそやうはあり  
出づる代の末業をさすくも  
強毅の戸を岡杜五房の門を設む  
よハ友なきををく貪をくも  
して五十年の徳丈らうの禁戒  
ちり  
幕也ひくと漢おろり門乃垣

愚考冥も門より塞なり 説ハ文法よ云訓ゆる之  
速く又論する言は辯なり又言をて人をて  
己の便をくむるなり  
色も君子れよく心をて仏も五戒の始をく  
又欲不とまき一きもれもなり 誰もく戒を  
五戒ハ事文敷義集曰元陸探海有吳人歳冠  
而至曰我獄神也執首乞戒師曰付汝五戒能  
不違乎能不違乎能不違乎 能不違乎  
乎曰能師曰如上是为仏戒  
くふ山の栢下ふ一古今集小一うめ師白ふ  
妻屋もくふ山やうふ銭ゆきとまきくそあり  
暗訪山ハ山城之

世に思ふを憂ひて位夫思ふ思ひの思ハ何肉由之  
ありのふに彼の花を抱女ありたり  
人生七十古来稀と杜甫の句あり  
南華を仙と老子く老く中も三教の一なり是れ  
その立入るる文をよかり  
孫敬の戸を閉てとを世に求よ曰楚國兄賢信孫  
敬字文宝乃因戸讀書時則以繩繫衣足之梁上  
嘗入市市人見之皆曰因戸先生耳也  
杜五郎の門を預むる友を友とて一書を  
一書よ云杜五郎は杜子真くと呼するある杜子真は  
ある守漸明くと兄とい予り語かり巖山云

華溪筆談曰穎昌陽翟縣有二杜生者不知其名邑人但謂之  
杜五郎所居去縣三十餘里唯有屋兩間其一間自居一間其  
子居之室之前有空地丈余即是籬門杜生不出籬門凡  
三十年矣黎陽尉孫軫曾往訪之見其人頗蕭灑自陳  
村民無所能何為見訪孫問其不出門之因其人笑曰以告者  
過也指門外一棗曰十五年前亦曾到此棗下納涼何謂不出  
門也但無用於時在求於人偶自不出耳何足尚哉問其所以  
為生曰昔時居邑之南有田五十畝與兄同耕後兄之子娶  
婦度所耕不足贖乃以田與兄攜妻子至此偶有鄉人借此屋  
遂居之唯與人擇日又賣二茶以具其糞粥亦有時不絕後子  
能耕鄉人見憐與田二十畝令之耕之尚有餘力又為人傭耕自  
此食足鄉人貧以醫自給者甚多自食既足不為更兼鄉人

之利自示擇日賣菜一切不為又問常日何所為曰端坐耳無  
可為也問頗觀書否曰二十年前亦為觀書問觀何書曰為  
有久惠書冊其題號其間多說淨名經亦不知淨名經何書  
也當時極愛其儀論今亦忘之云々○是ハ門を戸さし一軒ハ  
門人來ると詞を誦す予以答言を乞ふる事は分け付も  
一々之事之氣憶する事あるをさしハ悦おこして  
陶潛の云々を令あやまりく古はよきを杜子美を  
説正也、又修之杜撰は落てつて融くかの麻福田の  
娘事を貞門の七代お哲をちりめ宗周任口の大勢の  
皆忘れて息をわけし事あるにぬしおやし事なり  
さしたハ熱と又事又解おせざるをいふつて  
かこさしや

毒海長老我を戸より

可きこと修るを葬りて

何れしや流し果たるすまかき

毒海長老はる未考

後醍醐帝の内渡を獲す

御願年を行て草を何故志のふき

愚考後醍醐帝ハ人王九十五代後宇多帝ハ二の  
皇子ハ内凡指しやうせあひ流千載集すハ  
流後指し集ハ成源金三の時の事ハ流ハ  
むと寸天皇流ハ山ハ山ハ以事臣相師賢を  
才代して台山ハ少して元を糸心六流羅  
勢を及心帝補正成を石軍夏を任

セまふ彼かしくはに流歴し玉ひ再び位し  
昂りよ是皆る氏の功之天皇私よ大塔を  
弑して自ぬ軍と稱すをふくまひ  
貞をすてき氏をすしむ初め  
終ふをゆに幸し都を建南朝と号し  
延元三年吉野に崩す二代目後村上院と号す  
よ三代のもも帝よ至りて和賤あり南朝  
五十二年と云く

馬上吟

乃の意は木槿とるふくたれ  
一書よ云ん槿むい只下は兼りてせし  
はよまき例よ引るるれきさしてとみふ

るよくとりて中失せむういとあまの心悲し  
心癒きまよこそ人もまじかたのこゝろ思ふ  
そをくらふふもとよりてそや詩言乃  
をさるべきを木槿をくらふと独視をのを  
しめて見おさるる能治のおうみかたは  
滅し同然すまき眼茶体さあ木槿を嚙と云  
あつとみのみあつとりけい句はつて優し  
やうけけたるあかり  
一書よ世の諸よ出る杭はこゝろとつふとつ  
のふ縁分量をさるるつとつふあかり  
或人よ大全よい白大秘決ありき人並し  
ちりしちし初まの御さかゝる流よまてつ



へうしに古くは「親は自らをまじふ極根乃  
かけよ居て裸りし屋のふむくけかおんく  
本権のふむく葉のふき形の色くまきすなま  
るにものさし」裸をいへぬ意ハ三ツ四ツ又ツ  
ふかきさし」かのふむくけを或いかさし  
あまむくすりつけさし」てやうつかいし  
たへんてはる母のふえよある。そ母の  
ゆかして居るかゆきををみていていさくふ  
しむ本権をいさくさしとまむくせし  
てやうしはりかのかまき」しむるはそ  
すしむ親の目をまじひてかの本権極より  
つしむつさしむくさしむくけのふむくお

白文三十三

えりすさふあよかの古交ありはさしむをそ  
古教とて候よ用ひて白くさしむ本権よ  
かきくさしむのまむくて只本権かとり  
てもかまむく裸の字はまむくかさゆみなり  
童の字ハ古教とりのあまゆみかさしに  
やんをかゆきさしむるはまむくし創本権  
裸童かきしむむくつかけし成教せし  
則ち教も候もあまゆみさしむるはまむく  
を杜撰脱説をとして解すも多難海の舟は  
かきしむ

角力の画題

得才了解合ふもみわ日と候

俵泚筆時記云羽鳥尾不似の里山のたけよ  
蒼々道の一軸ありてあかあ傳てふむう一某の  
公卿をありてあかあにたてやう。うまひ  
先礼よく是よ遇尺寸心さしを感し玉ひて  
死取のつれいよ自画一枚をよまふあかあ  
傳てて是をたけい画角力の画さしり云  
了ふまういれもさ形角力の様後よあは  
右い左。かくのこきああり既よ四百年  
と行く後画さしあかあさういえ縁の初  
まやけあかあ羽鳥尾の時此里さうあかあ  
さうあかあいこく古画をおかてあかあ  
さうあかあさうあかあさうあかあさうあかあ

白丈三十一

画契病に復英すに坊さういれをかあ  
時風さういれ。二月カササ月さういれ  
角力さういれをさういれの角力さういれ  
さういれあかあをさういれのあかあさういれ  
さういれあかあ

許六画

勝角力いつまよに某のめ  
むういれさういれ積又屋さういれ角力  
一書よ云揚に及とつふ字のわういれ  
俵泚さういれ古代をさういれの白急さういれ  
一書よ云東ハケ國のスカを居とつる人鎌倉  
右丈の館よ来て重忠と角力の勝負を

分たむるや成るは損れはかれの自負を情  
平治の事忠と是とむうすむ山鳥帽子  
のまらううが忠名とのまの肩をほつそほ  
揮まぐりきり  
茶古古今著聞は忠君と富山と角力のま  
あつりされとも後との角力の句とのみ  
見るるれとるうれ今るの仇誣と看破す  
〜  
東花坊此句と景はも花見のた〜ハ七き衆  
の句を即無非と有り〜い〜り〜花の泣笑  
〜て〜より切字の論も及〜れ七き衆のま  
法を〜り〜かり居の一字の態態と認す

白秋三十八

俳諧の清和とあは〜ま  
愚考及〜つ〜字〜わ〜り〜れ〜と〜斗〜て  
法念の忍辱〜を〜り〜居〜と〜つ〜ふ〜ち〜び〜の〜れ  
上〜り〜極〜とい〜る〜お〜き〜し〜か〜ら〜む〜ら〜定〜り〜た〜る  
〜を〜い〜た〜い〜お〜ら〜〜か〜ら〜む〜殿〜の〜御〜殿  
の〜を〜居〜居〜中〜と〜り〜あ〜ま〜等〜〜と〜ま〜了〜る〜ま〜は〜方〜を  
何〜居〜御〜用〜と〜り〜あ〜ま〜あ〜〜居〜海〜人〜藻〜芥〜云  
顔内裏殿と中ハ執柄家のか〜あ〜〜〜云  
極〜の〜海〜三〜百年〜己〜來〜の〜通〜流〜を〜温〜故〜知〜新〜の  
美〜理〜弁〜よ〜へ〜〜先〜ま〜と〜り〜名〜の〜〜〜と〜動  
さ〜る〜は〜美〜理〜を〜一〜二〜と〜す〜〜〜は〜河〜津  
及〜角〜力〜の〜名〜さ〜く〜ま〜よ〜り〜昔〜ハ〜也〜又〜名〜称



学麻蹶速より角力ハ始まれをきき  
て教父を能けき。法をよくし味すき  
あり。神代ハ和吉始云神代ハ  
建御雷神建御名方神力競のりあり以上  
回古又記人皇に至りて垂仁帝七年七月大和  
國学麻蹶速と云スカあり又出雲國路見岩祢  
と云旁とあり。此ま人を召て力をくくへむ  
岩祢カカきさして蹶速ハ脇骨を折る腰を踏  
ておろれ。此より日本記云へ。是ハ人代角力の  
とあり。頼朝公よりせあり。河津と出さぬ。又ま  
よよせあり。こころをゆいた。法をきくハ

一角のふゆらき。此れ神代ハ。忠退補使を賜  
征夷大將軍に任す。是武家天下の始なり。角力  
能くハ。既述たる。教父及ぶ。くむ。い。き。け。角  
力。み。ら。れ。今。を。平。の。代。より。て。角力  
場。の。言。様。ま。同心。役。の。起。る。因。を。て。角力  
さ。し。た。ま。を。出。さ。る。ハ。お。ろ。カ。士。ハ。法。候。方  
の。法。拘。り。て。任。令。ハ。認。たり。も。常。カ。す。人  
ハ。角力。を。し。て。お。ろ。カ。と。り。ま。り。お。ろ。カ。と。り。ま。り。  
於。て。教。父。及。ぶ。入。用。外。の。人。は。て。ハ。候。せ。及。ぶ。も  
蹶。速。及。ぶ。も。か。こ。り。て。一。角。法。就。ち。は。是。は。の  
認。あ。る。角。を。及。ぶ。と。つ。ふ。字。ら。お。ろ。カ。と。り。ま。り。  
法。を。し。て。お。ろ。カ。と。り。ま。り。と。り。ま。り。と。り。ま。り。

漢人をきつて出り心初ねると、何意おさし  
まゝしてさむく後父の... けを可きぬ白と念  
る〜

古伝

おのり寺とて一といふもせ成が

画賛

勝ちるわとまゝくまき意致ぬへ〜

一書と勝のさるゝまてやさ〜くまなも  
さ〜もさるをさ〜くまてやさ〜くまなも  
を〜とやさ〜もさるをさ〜くまなも  
やさ〜も勝のさるゝまてやさ〜くまなも  
み〜とさるをさ〜くまなも

白紙三十七

愚考此白く通下と〜少集ホよ一品  
改は移ゆくの状のまよ〜風〜此白と〜  
ゆある中〜い〜あ〜く〜ゆやを海をの寺よ  
ての吟とあゆを却て高の白を〜遠へ〜  
余人の白〜て〜集〜た〜も〜

伊智お玉のある茶店又休む

〜に我を思ふり〜や  
川へ流してお玉の料張〜ち  
出〜る〜云〜え〜其〜女  
さ〜り〜の〜主の妻と  
な〜り〜の〜あ〜も  
つ〜る〜を〜

新儀の宗周ゆきつたわさり  
あふそをえて句を懸ひら  
きりつと例おろしきま  
いひ出して志きつた  
けりつていさかたつたかの  
浪のきくう白よ草のそ  
れおつてつてつてつてつて  
とつて白をさつてつてつて  
蝶といひつてつてつてつて

崇み香巾つてふの翹りまきす

愚考用枝活法曰都下名妓楚蓮香と云国色  
を乃也毎出則蜂蝶相隨慕其香也又白氏文集

白秋

為君薰衣裳君聞葉齋不馨香云々索隱云  
蕙中綠葉紫莖魏武帝以此燒香云々示雅翼  
曰一幹一花而香有余者蘭一幹數花而香不足  
者蕙是也と云て例もももあつて只かゝる例  
例も脈のうらた不みよあつて白はか  
白はかおまふたつて武帝の蕙中を  
て香も又楚蓮香はつて人よと蝶の志を  
又君もあつて衣裳は又重すたつて白の  
白はかおまふたつて蝶の翹りまき  
例も脈のうらた不みよあつて白はか  
白はかおまふたつて武帝の蕙中を  
て香も又楚蓮香はつて人よと蝶の志を  
又君もあつて衣裳は又重すたつて白の  
白はかおまふたつて蝶の翹りまき  
例も脈のうらた不みよあつて白はか  
白はかおまふたつて武帝の蕙中を  
て香も又楚蓮香はつて人よと蝶の志を  
又君もあつて衣裳は又重すたつて白の  
白はかおまふたつて蝶の翹りまき

何れも言を喜ばせりしとて、  
御城は果新頭とて、  
す

丸圖て、  
門

一本は守業院とてあり、  
玉川

浪化公曰、  
ひらて

をきて女をいさめ、  
是ハ井出の玉川

習てをきき、  
お

玉川は女におもひをよそひて、  
浪化公曰、  
ひらてものおもひ袖のぬる、  
をきて女をいさめ、  
是ハ井出の玉川よて山吹の名下す、  
習てをきき、

美の玉川、  
浪化公曰、  
如仰考

ひらて、  
一書は、

さうさう、  
さう田、

さう田、

さう田、

愚考、  
の右、  
物のは、

書あり省る表徳棟雪しやよふいといつ  
きよつてもよせあり一本よふふふふふふふふふふふ  
をぬれハ非なるへ

静斎云今集「秋の路をあるるのすくりに  
すきつけをふのうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
さりま

愚考その種あり六百二十種某の種あり凡百  
余種穀あり凡四十余種と云

是より古畑より用カ云の詞は勝方より及  
この肩方あり及くといふをまきり

とさり及くぬとくをありふさすにありお  
して同じもふ見す

妹さうなるよ

みまふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

一書にふのふあり及くといふを踏し  
て通ふむとくを

名は八体あり

八朝也天乃橋をまのの

是も古畑より又云九世の渡とも橋を  
日本三景といふ下渭松島岩崎天橋を又  
三景を和分浦々笑塔竈切渡文殊と云  
切渡ハ天橋をさり丹後と謝郡之橋をハ

ある方より松原出合で中がーきりてありき  
凡景をまありのりよ見えながくは似たり  
まゝとくし扱是をよは八朝は結いふふを  
田舎の草田面草と号けと字の訓をかき  
用ひて憑の節供とよふ君臣朋友相親の義  
よに懸るの儀あり久しく中級したる  
人くも廿日おとらきて信を通し合の  
まゝして移すの中級たるをくつてよせて  
中細く未子ののりのちくくむらひ合ふ  
との義理をもてかくはる儀ありふふり  
すくにおひて八朝の義理のの義性く  
西上人のよるる存れあり

葵の代より右のうに二丁はと  
か入ちとこりりの流ありあり  
むらゝにかさくはと見え今  
もとくしの字落るる  
ふあとくし試ようきせすかそや  
愚考西上人とくしの流ありあよも委りんハ  
略し傳るぬみ文をなほそのとやと書る本あ  
ずしありそくぐの節用ふとくも濂泛溜  
濂濺注灌以上のセツはる上よりそくきかける  
えさり字義は見えくすくも濯  
雪洗以上恥を雪く口を漱く衣を濯く  
是すくくとそくくともを臨の遠ひたり

心をそくくとらいたれぬ花おちり花ふへ  
そくくちも花うへにありをかりる花くすくく  
水へも花を入りする花さかり彼楽天の詩よ  
但有泉声 洗我心更無俗物當人眼是亦の情  
よふらふて後令樂天西行よ及もぬまでも先試  
よすくくちやといふ白念すか

然れやや森の家ちる新日也

文部丹後れちのく旅より

ゆるるとさくくち

よふらふ戸也野と家の待まうけ

画契

西行花茶麴もかき松乃家

白紙二

一書よ露沾と庭茶のこ無さくもく彼作庭  
の掛花を堂してよ一花山ふくの思かほさる  
る

また花細き加賀の園うくく

昔良も花をやめて伊智花

玉長崎といふまよゆりありあれ

を先きて花とまにけりして

例れふすとも花の系と去る

くち花もの思くく花も花

恨望を花れつれてまよまき

うこと一平もやう

今日よりや書付消さむさ花家

一書は桑畑乃か賀よりの吟く唯今まで同類  
二人ありを著る良と先立るる類よつけてと笠  
此文字成満して唯一人と不くとたさくむら  
あふくあふれおせひやうるをさうりあり  
一書は長崎と桑名のむくひよて本香川の巻く  
蟹を元のりりり前漢書後武別李陵詩は蟹  
鳥俱北飛一を元独南翔子當出此館我當歸故  
郷とりふえさうり著る良う句よも古ふのあり七  
効大境よくをりりれを助す

如新う席上の答意を制して  
志く家のさひりり味を忘るるな  
芭蕉少ぬの俳諧と貨素才一よ一汁一菜

菓子と並豆よて反古せうよ書ても俳と  
とさく俳のふよ花英よ山海の味をそひ  
と俳諧乃の本意よあふいとあり  
禁戒よ云英食跡味よふける人化るよふ  
まやれいとさく

二見は浦よさ  
祝うとひろふやんほき石の音  
一書は西上人二見は浦よて人木き石をむら  
ひて祝う扇をひきてきて文巻とありお虫  
さふの付あり

松方れ也書急いさう急い引おた  
於君う崎よて



古洞の吟すなりおとみなる時とら相品久良翁  
よて能見堂の入江よあり千逢の形素き  
てそれ名き

笑戯る目も雨ふりて山を  
所々かくれり

浪化の曰家その親也此文墨家のるも  
見入るくは書方の付雨のかる山の端此より  
よせて此方の書よ笑戯る目と雨降して  
くまの雨にかられたりと然れをお根の伴  
夏は儘きやうと足柄山とて風景いろし  
あれも了也士のやのさる日と目とけぬよ

富士の又いぬ日らおれ風景面を  
雨といきそくく云つて  
一本よ書しりれと出す  
一書よ云志りれとあはれお通すなり  
為集よしりれとあはれ非く文政の秋  
小よしりれとあはれしりれとあはれ  
見てもおよたぬふりれを方言を  
とふとあかりを  
思考書志りれと下おのあはれ不  
旁こめ秋しりれの藤懸と不二を  
余れ山くのめつるよ見巡るをこを  
りれと書したるもれと志りるといふ

るやとある考へ

崑崙ハ遠く西へ道ヲ  
方丈と非仙の地ニ照レ  
ありしハ土著ハ地ヲ接テ  
養テ之ヲ食ス日月の爲ニ  
雲門を以てと向ふ不  
くす表すして吳京千  
多ハ詩人ト白し後  
文士文人ト云葉を經リ  
画ニし筆跡揮ふる事  
恙破姑射の山ハ非人  
て其の白を以て也

百秋四十五

よくせむ

愚考 崑崙 滑崙 欽澤淪 髡崙 滑崙  
崑崙山ハ度一万里一万余千里王母穴居す  
の云と山海經ハ見えたり昔昔方丈麻州ハ  
列子曰渤海の中ハありて非仙の命す知  
凡人の到る事す一士居ハ二十名の事  
七初ハ後ハ云々 而ハ云々表す  
是ハハ八葉ハ初リさせることくありて  
うゝ表す 釈迦嶽 弥陀嶽 大日嶽 不  
動嶽 薬師嶽 観音嶽 浅間嶽 地藏嶽

以上留去六強に富士島本氣通經云孝靈帝  
 五年近に玉比折湖水湛富士山出現  
 神社啓蒙曰淺間神社ハ強に玉不其郡  
 あり大山祇女木花岡耶姫本地大日如來之  
 山の言凡八九里はと云く六月朔日より糸治二  
 十日を限りしに富士八日本宮並山すの神  
 皇正統記曰秦始皇仙を好み長生不死の薬  
 を求む徐福を以て日本へ遣らしむ是時  
 三帝三王の書を繕ると云く徐福を此山に  
 遣らしし秦氏ハ皆徐福未詳なりと云く  
 徐姑村の山に神人莊子曰藐姑射之山有  
 人居焉肌骨若冰雪綽約若處子不食五

穀吸風飲露乘雲氣御飛龍而遊乎四海之外  
 此山の系ありて方高き煙をもて才一と云  
 煙秀ハ不二の才ありて才の万一而  
 系を以て才と云ふ事あり

法を以て入世出志を示す  
 松を旅行の日のしめし  
 新風也 志す所ありて  
 画契

新風也 廠のありて時なるを  
 一書に古今集に「秋のたれを休つゆと云  
 あり」のたれや路ををわく心のかへ  
 松田一

病尸此等田にかちて旅探が  
去来抄曰猿蓑樵の時此句一入集にへしと之  
凡兆曰病尸とすし其たれと小海をにナリ  
いとく白のかげとことあし〜〜〜誠と亦た  
つふ去来曰小海をの句いめつ〜〜〜とてもの  
業し〜〜〜時を中らほもむ病尸を拾言  
強幽〜〜〜てい〜〜〜愛を業し付むと論し  
〜〜〜とて入集に〜〜〜後先師曰病尸を  
小海をち〜〜〜同〜〜〜に論〜〜〜やと  
〜〜〜

目にかゝる所和志を〜〜〜  
凡の〜〜〜を詠まを凡れを次尸の秋

一書又凡げせるといゆる石より浪路のゆ糸及  
〜〜〜とふ〜〜〜と、旧事をおもひ〜〜〜心  
〜〜〜を〜〜〜次尸の眼糸をいふ〜〜〜  
〜〜〜のよ〜〜〜れぬぬ〜〜〜にして同〜〜〜  
〜〜〜と云

兩地りや世間の秋を 塚 甲

愚考東都芝居の由其根元記云元祖中村氏  
猿蓑三所は教中と寛永元年御言免ありて  
中村に於て太鼓櫓をあけ小多をよてお初め  
同九年人形所は〜〜〜同十一年市村お初め  
御言免ありて両座とある正保元年来本撰丁  
座御言免あり中村座今此塚所は〜〜〜安

血まゝうつらされ申村おの言の所をもて  
芝居の根えとけ故工榎早とく揮出して根  
了あゝ

秋十と世却て江戸をすけ右々

一書に客舎并列己十霄帰心日夜憶感陽之  
場更渡葉朝水却中是故郷とく此詩  
此意より似たり

愚考貞享元甲子吟節の中此一句く此意と  
此句等始よりあれは世さし記節とも云詰此  
意をわけて江戸より十年此景をわを降たれを  
伊賀のりりハ一むりかたれは却て江戸を右  
にれこくよおすひ他玉入心比せるとあり

此れうらに十おと似か白れうち又秋十とせ  
と似るまでと事業の心夜もと事さるし  
事さるしとてハ一季の美にこる友と十おと  
似れされをとりて十おとハ似るへうり秋十  
秋とてさる一季此景にとるあゝ秋十  
とせとけ十妻とと似るくうり秋十  
秋一熟の事さるあゝ一稔の美やよ会ふと  
まゝ

かアかけ田面此熟百里の秋

一書に刈込の田面と出はぬ不に里れ秋とり  
けてかりもさるさぬ不に里れ秋とり  
まゝ会ふりりれ刈込の田面とては一句

此魂をきつらせしるよくとあふ

知里の才令あふ新宅地焚

よくすのちやをよるふあふ戸の秋

一書上准南子说林曰傷休具而戮風相吊

大厦成而燕雀相賀

愚心考知里の吟海歌の千代舎氏よて知

の門人すうり知里より三代目傳芳方の時喝

見ゆるに意の懐紙目時崎の千代は拱の

奉納あ心の懐紙目時崎の千代は拱の

不之藏く知里の時祀翁おし止るあり

をむつし〜千代家来此の書にを本お

書てとせさる旧名ハ利ゆ〜るあ〜と

百秋記十九

千代舎に志せといふ名を授け居候子  
親とま〜れ〜代傳芳既〜三代目志を  
以よせ予〜合せたりき大工を所せ〜  
て千代舎地帳下にあり今ハ三十歳あ  
あれをい〜さりり心

為別

美〜此の材木〜つ果々本居の秋

愚考尾張より出て嫁控の目見むと云ひ

きり〜おかし〜さり

旅切

所〜てさ〜秋を野さ〜の境

愚考嫁控若光さ〜り〜戸へ運り

時のみさり

族のみに

いふ起す記を浮世の秋を思ふ

思ふ此の句も同時の小法と遊ふとの同よて  
みちをくたにを念のまゝうちやうふてう  
まゝく探るる居るをえての思ふなりおふよ  
そは人誰か是の事を一向に思ふるものおふ  
や一道を思ふをす人の賜ハ捨別申して  
同り此の論にあはる

カノまは神宗

木の松はまきくせー代や神の秋

思ふ考常陸の麻崎郡系沖武術雷神く

一奉武甕槌命 社於二千石より建久四年五月

頼朝公被補修云く

是ハハシ 香取を移此よいま

思ふ名所及神祇の事ハ下録ハ

一宮香取郡社於千石と云々祭神ハ

徑津主命春日才二殿同体云々

秋の及神味香壺もたふかりりり

柙亭云此ハ兼母の契さかり句空ハ画ハ

翁ハ契を孫うひて養のかげもあふ守と

族中

け秋ハ何て年ハくまふ

十六百ハくまふ事ハくまふ

うにか小貝ひろくむと種め  
候に、みをきくは上せり  
あり天全何来とりふもれ  
候に就か竹筒ふとまうかやめ  
よきく免きを僕あきとみ  
にこりかのせて遊んぬ所のる  
と吹つけぬ候はたのうちる  
休さのちあふて候しき法  
華するありあつた茶を飲  
酒をありて免て々々書の候  
一に候は候ふり  
年一と中候摩ふかたたる候の秋

白紙りり

又細き菅さ狐の候は秋あ丸国の恒梨  
りふすくこれ貝はまの後格の小貝とりふ  
美我くともさくつせ見よて<sup>見たり</sup>茶貝は貝  
山掛貝なりとりの秋の末ま貝なり西都上人  
へ改そむるうらひくにか貝むらふとていのの  
候といふあふもむとよ免るはけま  
此名よてあひの候は候と候をりふ改を  
の入海の末に候あひの候と  
天全何来とて屋の家号を名のとてあふも  
候に就か竹筒ふとまうかやめ  
りふもれ免きを僕あきとみ  
とて候ふ



須磨、津波の名取、西須、中須、  
東須、廣須、廣須、陸奥と云ふ所も  
忠度のうらひ物と云ふ所も  
と云ふ所も、さう云ふ所も、  
好む所も、さう云ふ所も、  
体をとるあり

木も、秋の節、  
胡蝶、老社、  
愚心考、古人、  
廣安、  
脚、

光、  
さう、  
事、  
ゆ、

秋、  
思、  
片、  
た、  
是、  
志、

志、  
心、

白髪ぬくまうす此下也  
思ふより本集より「夕々此れをよもまきう国此  
きくもくはしりまうす此下にありきこゆなり  
道に生ハ膝をん治法病在喉中胸中者  
枕二寸七寸病在心下者枕三寸四寸病在膈下  
者五寸枕六寸出気氣納息者名曰治國  
口温気咽之者名曰補以下也寸不為病を  
きくもくはしりまうす此下にありきこゆなり  
まうすの枕は仕事より此さうは毎枚紙  
きぬくまうすをりよ一寸下る時ハたのつ  
まうす解きまうすへいと云く又治る帛麻  
本條條多くと隨えさうり長一肘半中よ

白林五十三

毛麻 蒲 柳葉等なり又決明麻 巨  
と服を鳴くのにする本枕はま自の園さう  
養心一の書をきくに本よその者  
是れ伊賀れみのむし養心よての台ことして  
さひくはや行よかけ半るたかひ  
加賀の園を田の神社と信つ  
ま度の甲海に切あかり供著  
係氏に屬せし時義朝公が  
半くつたなるまうすのやけは  
まのまれよあし目麻より  
吹返してまうす葉かすはの  
げりもれ合をちりやん

就其の狀形并事なり  
書付死の後亦多義件  
新狀は偏る事社は未  
らぬよう一趣に次第ほせし  
る事しる事のありし終記  
に及く事なり

吾さむや好甲北下の事なり

一書は詩よ曰十月蟻蜂入我林下とある  
を以てして交登のこゝにひもれとある事  
むやなる所を別當としてゆゑむる事  
りし詞をさしむる事なり  
愚夫其登の端は通にあり唯一目見て

たゞしをさしむる事なりとありてあはむ事  
中子見ハ新録別當としてゆゑむる事  
なり出たるも此は源平盛衰記よも完を懸  
て書きてゆゑとあり

此書は家ハ小海を以てしる事なり  
増訂書とありつきか事一とあり  
とあり来て新よ入やき事なり

愚夫其新古今集に「床ちく」ありか  
まはる事なり人此をえも其事なり  
ありとあり又

一本は其の事なり又文章ありし事なり  
其の事なり入也事なり

不潔させしむる人何んた梅の虫  
雨亭云不ろもつましよてあつてすか  
そんを鳴もせぬくせに梅くふつんや  
きいとうとせめあつる方なり

大和の玉よ新脚して暮  
下郡林の内といふよよま  
此所の例の千更う回置たれハ  
日頃とてゐるしてほを休む

義とらり契トああり  
繪弓書毘毘よなくさむ竹の契  
愚考思はし一紙紙のうちのうくま堂れ  
序よ大和也りいとて後ろを毘毘よなく

白秋五十五

さみ竹田みふれあしーかなと隠れよとせ  
りよ此も白をとりけせ人もてさる  
ととをりうく宣たるかまける竹のおく  
縁うつちを西は巻よきくをして猿橋  
おの清うたなくさむを真あり竹御あり  
女をさへーををらうらうとて男の商賣  
もらされと妹の契ハ女よ治ませり  
とて竹の契ハあつてあつてよまひく  
出るしをみぬとてあつてあつて一白の  
元治ハあつてぬとてあつてあつて  
のちと急下に合やとて

秋れみり志也秋そのくらうつ



いづれを帝きこりめして内  
侍中位の不さ子は勅して足せよ  
玉い少れともふつくあをさうり  
さうりをまはるおあしせよとお  
半ありつれともうけひうさう  
けきそ  
行幸して内らむするよこひあ  
めてさつれをめでおをりま  
すれとまうひうさうりして  
やみぬそのうち月の都よりむ  
ひ  
はありて天上して失よるり  
くもりのうさうよゆつるのみ  
君も信も  
の洞よりけきよつるへま  
て秋風

いづれを帝きこりめして内侍中位の不さ子は勅して足せよ玉い少れともふつくあをさうりさうりをまはるおあしせよとお半ありつれともうけひうさうけきそ行幸して内らむするよこひあめてさつれをめでおをりますれとまうひうさうりしてやみぬそのうち月の都よりむひはありて天上して失よるりくもりのうさうよゆつるのみ君も信も

富士川に舟をりて三つ舟をり  
舟まのほりありは川のまはる  
かけてはせれ信を志のくも  
信にまはる舟の命は信ると  
まはる舟の命は信ると  
舟まのほりありは川のまはる  
かけてはせれ信を志のくも  
信にまはる舟の命は信ると  
まはる舟の命は信ると

悪かれきり母よりとせられた  
るは汝をうらむをよきおぼし  
只是天よりして汝を憎めつ  
まきをを泣け

猿をけり人捨てに妹の風いりふ

素堂云富士川に捨てハ憫限の心を見入り  
かふるまき、涙を枕としてすそをむき泣き  
泣れよとておもをぬきまき「お子がふた  
り此そをりまき子より子もやむ心かいたく  
悲しりれともむし人の捨てたるまきかむひ  
よせてあをれを泣き泣き  
愚考それハ合系集の捨て子にふたり定家

白秋五十八

解此子懸為家心の交に「捨てり親をさふまに  
かといけり世にまきをかきて捨てたをたのしむ  
たよとの念くしかたをひてあをれをり此白よ  
つきて捨てしのは教あることと懐語たれた是を  
略し此も文字様をさる人 猿置て猿をす  
て 此白よとふ利たのしむ捨て子に

宋書曰猿衣之初置蓋勿置干際安収道  
路送衆之嬰児云此の衆よしりてかく  
あひかくしきるりもあをり  
白れ意ととる字中七文字よて猿をけり人  
猿をけりて實くくも三ありは泪と杜子英  
秋皇の侍も作りてとくかすり比上もは

そ然しさと抑ふるも、秋風の吹あつたるか  
か—さといつれをかたしさとあると向つ先  
たる之様と人間と一とちよいふたるとく家又  
制隠れ意を悟るへ是も是小の業も此同義の  
款を移し—して依り出せるもの之官を款の  
依り十六款、所業此句のしよくを—く出す  
依りれを見合す—

松枝を依りて、秋の気

愚考あつても此よ云松もよまむ久しく千と  
世をも絶ぬへく竹も前文ありて、又子此よま  
不何やゆつらと志し、山よ何きて世の  
事よいし、まゆきくかぐる、考、整ふめて、友

松竹をれを秋の十ひしさを志れとむよめ

吳漢の書にいし、一、常盤の  
横あり、伊智れ者、武いひし  
義、好友と似せり、秋れとむい  
つれの、こし、あ、似し、り、を、ま  
し、や、し、

義、好、友、と、似、せ、り、秋、の、風

一書よ、只、世、有、の、内、海、の、秋、風、よ、泪、を、そ、し、き  
き、の、外、白、と、見、へ、一、臨、陽、永、叙、秋、矣、賦、曰  
夫、秋、刑、官、也、旅、時、為、陰、又、名、を、象、也、旅、形、為、谷  
是、謂、天、地、之、義、柔、中、以、肅、殺、為、心、ま、く  
愚考、貝、系、波、蘇、政、記、之、実、々、系、と、今、洲、の、岩



此乃山中此里あり源平の母常磐  
墓あり乃の山表ありと云ふなり云々

不破にて

秋風也教も留も不破此実

故際云新古今集より一人すゝめ不破此  
実を此板ひさしありしものらハ秋の風  
の意を撰写してかくと伝ふるなる事  
愚考教も不破の實も和漢年表にて外のみ此  
もも美濃の事不破動にて天武帝白風二年  
は実を居ると云々又風去記曰天王と大友  
皇子と合戦此時天王方を報よありしハ  
今も此を不破の實と号くとあり又本朝年

白秋抄

代記より白風元年天王と王子と不破此実よ  
原を對しとあり又云元明帝和銅六年位  
原を割て美濃と号し云々

那谷寺と云ふ石寺あり古松

植ありて當ふ事此觀音

堂若此と云遠里かけて陣

跡此土地なり

石山乃不より白ありあき此風

細乃山山法白皇三十三の聖體とせさせ  
多して後大聖此像を安置し玉ひて形智  
合組の二字を分ちてかく事号し此云  
か賀此山中にあり

愚考所智ハ方一書ヨリして紀元ナリ谷汲ト  
二十三歳ナリ納メテ吳淞ノ花山法王ハ本朝年  
代記ノ人皇六十五代ノ章徒を依ツテ山寺  
ニ於テ祝髮法講入覺トナリ在任ワツ  
ニ二年ト云ク

令以此一笑としふも此去來也

ふせーきりとして、せ見遊書を

傳

隊もうさけ我はなちと秋は

一書ニ云皆川悉文操拾遺ニ陳書槐亭記曰  
秋天滿西湖流香陣東岱如動古人墓此心  
もあらしむと云ク

白秋六十一

愚考法師朝臣比師子紙曰仁甲納之匡房  
獨法宗安楽寺菩薩神の御座子々曲水宴以序  
文之上略竟母廟荒春竹深一掬之淚徐君墓古  
秋相懸ニ三尺之霜彼蕭々暮雨花是巫女之嫺々  
秋風人下ニ伍子之廟一冊す此序文披讀此は石欄  
をふりてきく御座此文句よきて類に唱物す  
と云ク 是此秋地を云ての句作ぬるの方ナリ  
此も亦くむたいうる芭蕉此は法たれをて  
何そ據り初る名やア、斎もさか

楓矢此名をつけて

翻の本乃そ念あつたな秋の風

愚考か此楓の矢く、す家来葉との候より云

事しつゝこれそと祀公の心むらゝく大く樹柎す  
と名のつれ一なり

伴紫北中村といふ事よる  
秋風也伴紫の墓系於津

坐右銘

人此經をいふたり終已くを  
説ふとたつれ

も此いへる層さむ一あり此

一書云後漢書曰崔瑗字子玉作坐右銘曰每  
道之之經一説己之長下略層さむ一といふ  
九傳曰晋侯再假道虞以伐魏宮之奇諫曰  
魏者虞之表也魏亡虞必從之諺謂輔車相

仍辰月亡齒寒其虞魏之謂乎之也  
とて人なせて白と

皇光木もつらた傳此文も不用之再考せ  
衣の子玉も坐衣の衣も唐土にて七は白素  
をまらうとさるも一白樂天云崔子玉坐

坐右銘余竊慕之雖不能及常書曰屋坐

下略又事至云崔子玉為坐右銘白樂天亦為

座右銘以身之道等平彈一矣予嘗銘心下略

されたるが約となく是を志す事あり

秋風也やまお中り風也

一本よすらあり字の中とあるは非し

牛新登の故のちろ路の秋の風  
一申の故のちろよわき海はかよと思ふなり

冬も縁にけしきを

秋かせや相さうこにて考 此書  
是考 秋九十九をいひつめさる 秋はなり相  
の多ありうこにて秋を考くくめ考 此書  
晩秋の寂を考くくめ

考来々もとよりいせの紀新

考ておくまらるる 考くくめ書付

とくく

西 東あちち秋さ木ま 秋の風

散 秋云「さび」はよ者をを おならむ北ハ

白秋六十一

しつこも木なり ありて冬と夏の在 秋よとくく

夏考 古来「秋」は入り口のやも 考くくめ書付

西ハかきくくさるるり 文秋は西ハカク 金魚考く

くく西ハかきくく 秋風の秋考のありてはさし

てかすくく考くくくもおもくく 秋風の秋考

をいひ送るるくくく 秋風の秋考の四字をい

善考 秋風通云居士曰東方為首以去方春生

明万物生之首故以木貫日 是東字也南ハ首

十種智慧門満故以十門 是南字也西言語

出於口二ハ口是西字之北ハ水黒也黒黒考考

故南ハ背則背字月略也又和訓もくくく

ラ也南ハくく知也西ハ日イニ也北ハクク

也云

旅の

赤くともつれなきもあまのぬき

一書云云新古今集に「旅人の袖ふきかへれば  
夕のさびひくき山にかけぬ」是れ心にかへむる旅の  
凡言外にありて初翁の語ニ云「春のまき  
と袖の紅くも入るる」と云

一書云云明詩ニ秋風吹將暮古道行人少是れ微  
陽色射我衣中衣云々

伝妓源云古言よ「改戸をく終あう」は方を  
あう」といふつれなくも秋風そふく是れ等の句  
にもあらず

白秋六十尺

一書云云金城にて赤くともつれなきも秋の山と  
し北枝と見せまふ北枝云おそらく此香林の  
凡云てゆむつれ山をまきくいはつて出て出を  
矢とむと中云の語云々はこれかかえよ北枝の  
了と世人歎き其全体秋の風をたしと試よ  
山と春うと並て云々

是考乃云老此心も昔子を合せたるらぬ  
秋遠佛における一字の一点 耦合らちかへるを  
はに流お云 嵯峨帝一日山崎河陽館に行幸  
して一勝を題して白岡園唯同朝暮鼓云三樓  
遠望往来船云々 小野篁云聖作恰好但遠の字を  
改めて空の字をたしむる天皇おとらいて曰秋

此句を知らず知しきるく天皇曰是ハ白居易の  
元本空の依り今違の字を以て是よりかき  
梓之下と白居易と異域同情の感興有るハ  
一字も大切なりすや

岩葉詩

金華を憐れしめてあそびたはま  
ささるる士の志なき又賢編を  
らさるるをいふも思ふにいと不  
とけれ如會山原を尋るる義を寄  
ふして其を賜へてを遊を  
認めかけて思ふ遊を肺肝の男  
と抱えしむ予とちかふを

十と無さるる九とをいふは三  
をくは官を辭して岩洞に先  
賢の跡を慕ふといふもを母  
をふたすは移るるをいふとて  
いふは世にまたいふはれとも  
榮原の月をいふはれりし  
ゆをいふはては未仲の秋  
中居る由并命は此波の枕  
よ月をいふはては後念はを  
實をいふはては思ふはちか  
かきしはては思ふはちか  
かきしはては思ふはちか

かきしはては思ふはちか

そこの母よさしたち七人の  
我子よさしをばつたいたしに  
をさす(ま)き驚のみす(ま)たよ  
ほつた公もある(ま)腹お(ま)た  
も悔(ま)す(ま)き(ま)つ(ま)も(ま)め(ま)たり  
た(ま)す(ま)し(ま)れ(ま)う(ま)志(ま)ち(ま)れ(ま)半(ま)う(ま)  
そ(ま)の(ま)被(ま)い(ま)う(ま)ち(ま)あ(ま)け(ま)く(ま)も(ま)に(ま)を(ま)  
く(ま)も(ま)あ(ま)う(ま)さ(ま)今(ま)う(ま)に(ま)れ(ま)と(ま)き(ま)の(ま)心(ま)  
す(ま)く(ま)志(ま)す(ま)我(ま)を(ま)か(ま)さ(ま)す(ま)ま(ま)う(ま)を(ま)母(ま)  
の(ま)根(ま)さ(ま)う(ま)か(ま)う(ま)の(ま)ち(ま)う(ま)け(ま)き(ま)驚(ま)し(ま)き(ま)  
か(ま)き(ま)ら(ま)う(ま)さ(ま)う(ま)付(ま)く(ま)さ(ま)う(ま)傳(ま)へ(ま)物(ま)  
族(ま)の(ま)う(ま)あ(ま)れ(ま)く(ま)ひ(ま)く(ま)さ(ま)つ(ま)つ(ま)物(ま)

睡(ま)自(ま)た(ま)う(ま)う(ま)は(ま)我(ま)の(ま)よ(ま)を(ま)て(ま)て  
予(ま)ら(ま)そ(ま)の(ま)着(ま)ふ(ま)ま(ま)さ(ま)の(ま)け(ま)り(ま)よ(ま)ほ(ま)う(ま)  
め(ま)さ(ま)れ(ま)一(ま)き(ま)し(ま)一(ま)を(ま)も(ま)王(ま)我(ま)之(ま)系(ま)  
の(ま)眼(ま)さ(ま)一(ま)う(ま)る(ま)を(ま)一(ま)と(ま)我(ま)の(ま)一(ま)字(ま)  
を(ま)掲(ま)げ(ま)る(ま)ん(ま)我(ま)と(ま)名(ま)つ(ま)く(ま)そ(ま)の  
よ(ま)ろ(ま)に(ま)登(ま)る(ま)よ(ま)今(ま)自(ま)の(ま)あ(ま)い(ま)こと(ま)を  
ま(ま)う(ま)れ(ま)い(ま)ける(ま)所(ま)む(ま)つ(ま)す(ま)か(ま)ら(ま)ぬ(ま)を  
く(ま)た(ま)な(ま)く(ま)て(ま)そ(ま)ん(ま)と(ま)思(ま)は(ま)る(ま)く(ま)  
か(ま)ら(ま)ひ(ま)や(ま)ら(ま)う(ま)父(ま)の(ま)こ(ま)く(ま)子(ま)の  
こ(ま)く(ま)母(ま)の(ま)め(ま)く(ま)ま(ま)れ(ま)こ(ま)く(ま)と(ま)一(ま)  
こ(ま)ら(ま)う(ま)ひ(ま)ち(ま)う(ま)れ(ま)む(ま)つ(ま)い(ま)ま(ま)る(ま)傳(ま)の  
愁(ま)の(ま)被(ま)よ(ま)む(ま)す(ま)あ(ま)り(ま)あ(ま)れ(ま)て(ま)枕(ま)





くびすらわーく似るたよる

○金草とまらるる哉具甲胃をりふ方なり

○文貨編をりれく文と受とをわさるてかこも

ける文受彬く然とくハあつたにひくく是君

子に切てり

○老症ハ毛子法子此湯乾石塊よりて運金のりふ

抄ふをりふ

○兼厚のりよくく陶湯のり五斗米のりる腹を

かゝむるくを和るくく母子のりよ世傳よつたる

るくハかりよくきせくあきくめたるるき性をりふ

○王戎ハ翠の眼さく昔書列傳曰王戎字濬仲和而

穎悟伸彩秀徹視日不眩裴楷見而目之曰戎眼惟

如菱下電くくせよ昔七賢と稱す父よおくまて母よ孝  
あやまきくくきかくく王戎く父よおくれきくくく  
つとして流戎もきく父流葉よおくれをたかひしそ  
るる表す

牙にー子く大根かー 秋の風

愚考まふ問金匡曰西方白色入通于肺矣實于鼻  
藏于肺故病在春其味辛其類金其畜馬其穀  
稻く大根もきききくく秋をきて辛くのりつ地  
も自然の理なり秋色白味辛方西

千里の遠て路糧をつく

三更月下無何小入といひ心昔

比人の杖ささかして貞直甲子

秋八月江上の御座をせし程  
風のあつらふ言ひなり

望みありし言ひなり

あき甲子紀行又中書しし紀行しし書書の登  
録乃ちなり

千二百餘を莊子よりえり

貞享之年号ハ和寛始ニ云周易曰永貞吉王用享

于帝吉菅原豊永考之 ぬらぬら皮囊包

血の抜懐して泪必集ふ 秋吹くといふは

これなれを身よりむはかりありありなり

一本よ

白秋六十九

天和三年涼川の養父難しあり

まよふ草花をいふ言ひなり

あつらふ言ひなり

是より門人学て芭蕉公海とよめり

一本にと芭蕉公海とよめり

あつらふ

芭蕉公海といふ言ひなり

よめていふ言ひなり

あつらふ言ひなり

とあつらふ言ひなり

しらの言ひなり

えんま言ひなり

茅舎の感

昔々天和とりの年号も和史始云後漢書  
小桓帝ノ詔曰天人協和ノ萬邦咸寧多ノ菅原  
在庸考之さて句比多々五雜俎曰凄風苦  
雨之夜擁寒燈讀書時同紙窓外芭蕉淋瀝  
トノ作声の付く  
一書云後ノ芭蕉此字をすつて集あふ出が  
さしりつゝ懐況さうり月あへく  
一書ノ芭蕉やふ盛ふ雨と出すと非くやと  
昔々意やふ一とあふぬへ  
むし一ふと百韻巻末の字

麩時土  
千春十  
ト尺五  
暁雲十  
其角土  
桃青土  
素堂十

似春五  
所雲十  
言水五  
華一  
芹蘭六  
峽水五

石ハ白表の六人目よあかり是時おぬやし三十九  
早く。巻取麩樹ふ不ひの心概ま。揚台ま角  
初ハ込の能澄よて白ひの花をゆつと名成堂の有  
書よさる意おぬとぬりまをそつて法人のこ  
よまむしてそる歌をぬる。理家の名巻を

おもふ〜  
侍よ云巻末名盛の式十三人上七人下  
に六人上十三人上七人下六人余々  
在十人上初之〜いつれ上を考下を偶よ書  
法方り

猪もともいふる〜  
以 考史記曰項羽圍漢王三匝於是風起西北折

木發屋揚砂石楚軍大乱漢王乃得殺騎逃去  
又文選風賦曰鼈石伐木捐殺林莽  
徐氏望ふの巻よ凡こそ史を以てあけつ〜  
法白神のき〜

ちの〜を思ひ〜し〜にせ〜  
ハ〜本〜き〜海〜れ〜た〜れ〜か〜の〜鏡〜所〜を〜以〜て  
せ〜り〜き〜れ〜ち〜の〜〜を〜思〜ひ〜し〜と〜思〜ひ〜し〜と  
族何れよ〜と〜思〜ひ〜し〜と〜思〜ひ〜し〜と  
〜思〜ひ〜し〜と〜思〜ひ〜し〜と

穂 存よおもふ〜  
見よれおもふ〜

藤く勢也 藤次り〜  
是れ國ふ山の〜  
是れ記よ〜

するよと落きくく男も木子かま  
 初草命とと本一とと又出る  
 松草命かふまうとと木とと松の形  
 草草命あふたふりよとと文とと洗  
 たらたけやすい日教経あ秋の家  
 松草命あふたふりよとと文とと洗  
 馬士の白と古細くいつれと子細さく見ゆ  
 夏草命あふたふりよとと文とと洗  
 草草命あふたふりよとと文とと洗  
 引白みん巾全等あななり  
 秋のりのらととあかきねのあき

大願和上の事とて来たりりる

鷲崎付くる垣地さくけをばりり  
 皇考鷲崎一名越る夏文須袋工南越志曰  
 鷲崎後東十和廻鞠就并越之始必先十和云々  
 又柳宗元詩の中一羽毛摧折觸鬣御宗一裡火  
 煽赫驚砲厨鼎前苦藥調五味膳丈振  
 腕左右視さくさくあて申廻鞠ハ後念より海川  
 のるよあきり厨厨五味を垣の大角夏と換  
 骨守は鷲崎北外全にやうあきさるる季時  
 此ここのさくけをさくけ  
 板まきちる鷲北相する北あきさるる  
 悪考様やとと法やふととあきさるるさくけかま

ひすくおちくわかりもたけし性あて橋よ  
棲心あり小椋と云

いふよ木もも花ゆよかふるこもが  
右側と

いらに時程通りかえりて

いかに時似るものもあふり

伊良古壽ハあめの初十妻くくおりる

木つとよに根をたぐく位 西平

木塚の入り也とリリ 教の 中

初と延室 次も天和の吟と

田中 結藏 さま

川 おくく子橋かすこの 略のあ

白林七十一

皇考法苑寺と三沢田中村にある傳古ふりて  
寺の八十五石と云

桐此本にうりては堀の内

古今およぶ勢乃一章も田莊の酒家といふ歌

ついでたかきとよとよ家の富きをとおひや

アとてたかきとよとよ家の富きをとおひや

桐の本やとりよるれこさつと桐の本は

友白をむむ是ハ桐もつり勢もあ

以回廊を称するれお白をたつとつと

と白を切て堀のうちを隔へきよもあ

況や勢なくたつと白法も古おれ裁入

たつとをわへうわぶの子れ働きを評するは

遠く回社の白磁土をえやつてさう桐の木も  
写すもをとおへてもふ後に心をめくつてはへまや  
すれぬ或人の新しきハ教むら黙をあつ  
くふに勤くとうこかめとれ論あこと此本を  
桐の本に方さくむとけつふも所用の論を  
きよは是ハ鶴を神として相も白紙の用と云む  
志くもは桐の枝のといへも官家の捨枝の姿  
あつても相も田家のふるまをるものくちてや  
其口を家も此桐も何屋の昂兵と云るへ  
茜垢云後成川のさよ 「文はれも神道の秋  
風身にしきくうつたなくさくは源を乃  
聖古ゆるの使もや

胡蝶云文選張載詩 蕭々タル 高桐枝 翻々  
栖ニ孤禽ニ 似たるすしなり

孫中

いつと名各の付屋さ土手々々  
此句心越新居と赤塚との写は終さなり  
之他くも初秋ニりるの以通なり  
かゝるをたもあつむを

鶴は目の今やさぬとなく 鶴  
雀の名はあつてもあつて四十雀

一書よ云少將の尾乃ふた 一のうまにつまむの  
此のゆゑとばおとひもあつてまのな  
之よて奈糸胎換骨して四十雀よま







稻花茶木もさけりや 近所

お不くの書に茶木もさけりやと云はれぬと云ふは非く要しと云  
俚俗語を又へ

いたくいては種ひろむ 冥に茶

五考の種は多しと云ふは種ひろむの四窮民の賜之  
翁も然しを独りよて此はあつと云ふは又

事文類聚茶集曰其責中田家ノ詩父耕魚上田

子斲山下荒六月未末乃官家已脩倉君鋤田當日

午汗滴禾下土誰倉盤中食粒皆辛苦二月賣新

絲五月糶秋穀孟得眼前瘡宛却心頭肉我願君

王心化為先明燭不照綺羅筵只照逃亡屋志くも

農家此言苦い、さくそやかひてまきく一粒の茶梳

よへるまで七下夜はありとこそきれを種ひ  
ろむの徳信おろそくに聴取かゝりて今やを  
要くくゝ織ら守りてあつと云ふは又耕さるゝて  
飽までくふく一りも大切之信をへて

種文殊苗も地花も種ハ善賢稲靈中茶集ハ  
親者老休も毘沙門のちりあふとされを信し米  
を善善種もさけりやめ

粟種にまほしくもあつと云ふの意

胡蝶と論語曰飯疏食飲水曲肱而枕之樂亦在  
其中又老杜之南隣の詩錦里先生烏角巾  
收芋粟未全貪

有る春や新雪の秋れとらちち  
 皇考源氏争い際のはれ雪の秋をいふ所と  
 ちつる君々や月もあまらうこよといふめい  
 かさしてはて終よりりあき入川向心かくし  
 かしらるるもく人へ一瞬すまらぬ  
 人たふとたよりて是く心もおこりや  
 おもふと一白の心も源氏のまき  
 新雪の秋とねらうく新雪の秋と  
 西の雪の紫よかきりあり  
 女ともはれ草あふをえら  
 草はつふ女おれ方をえ秋よまむ  
 皇考西の雪よ伊勢と今世の人れ白た

百林七十八

連ふせむと何と  
 別奪胎撫育之彼初上人に  
 ことらとなりのそに骨を措  
 是くするこころひかり  
 此女とも心あはれはの換  
 柳亭云庭室之系  
 和度娘年賢  
 徳公末弟

梅や中川おもひ出は  
 和度娘年賢  
 徳公末弟

此の書は徳の由に屬せしむるを云ふ又年契曰  
聖武帝天平三年誦訪國を廢しては徳由  
に保すといふに弱遠に信甲のまゝをよりこつき  
すくはしむる年浪をよを見し

之り月や昔年此の文ア答むる書

一書に三月月の出るにけられたの文アと見て昔年  
を去るに桂をよ答むる書といふに能楷  
のよつもの

一布に胆や昔年の名に答むるをとおやり夕入名へ  
此書寫のちややとをよる

昔年此の書は  
よて答むるをよる

明りや廿七枚も三の此

愚考昔年と書てひさちとよむ話ら凡去記  
一曰日本武尊下向の時筑波根の林下新計をよ  
るに新井をよるに自注袖をほめこまひる  
るに衣和漢書と号けり廿七枚を下強な  
まにまゝに酒花集の新注六卷徹よおを  
るに時月ありに給りける夜作記よるに  
月茶言志よてよき世をよるに三日月のすのを  
よるにやうき世をよるにたえしをよるに  
是則下強くよる新注をよるに  
船中のよるに一入をよるに

大層招渡就院より

何るに此を見よも似たり月  
七部大かきよふる

之々月の地を概ありその

又るうけやまの丘の夕月

一本よまの丘と出し又一本に

夕月も非之丘形にて夕月

形もたやまのつくと月形

山嵐茶の墓の形

見しやその七りも墓の之り

愚考せりの死をと思ふり

則ち初七りたれ下此

そのとりふたるを

